

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520301

研究課題名（和文） 2月6日事件と「途方に暮れる」作家たち

研究課題名（英文） 6 February 1934 and the "disorientated" writers

研究代表者

濱野 耕一郎（HAMANO KOICHIRO）

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：80383496

研究成果の概要（和文）：フランス第三共和政が経験した、ドレフュス事件以来の内政危機である「2月6日事件」は、作家たちにどのような反応を引き起こしたのか。本研究はまず、事件が文学者全般に「政治回帰」を強いた事実を明らかにし、その後、ジョルジュ・バタイユ、アンドレ・シャンソン、ピエール・ドリュ・ラ・ロシェルらが、それぞれどのように事件を受け止め、いかなる政治的選択を行い、またそれが彼らの作家活動にどのような形で反映されているか考察した。

研究成果の概要（英文）：How did the writers react to the "6 February 1934 crisis", a domestic political crisis experienced by the French Third Republic after the Dreyfus affair? In the present study, we first clarified the fact that the crisis forced "a return to politics" generally on the literary figures, and then discussed how Georges Bataille, André Chamson, and Pierre Drieu La Rochelle considered the crisis, what kind of political choices they made, and how the choices were reflected in their writing activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学をのぞく）

キーワード：仏文学、政治、2月6日事件、ジョルジュ・バタイユ、アンドレ・シャンソン、ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル

## 1. 研究開始当初の背景

1934年2月6日にパリの中心部で起きた右翼諸団体街頭騒擾事件（ただし共産党員の一部も参加）は、第三共和政後半期のフラン

スを揺るがした最も衝撃的な事件であった。当時の人びとにとって、機能不全に陥っていた議会民主制への不満を背景に1500名を超える死傷者を出したこの事件は、イタリア、

ドイツにつづくフランスの「ファシズム化」を予感させるものと映ったのである。

それまで政治との距離を保ってきた多くの作家たちも、この事件にはかりしれない衝撃を受け、ジョルジュ・バタイユがかつて *désorientation* (方向自失、途方に暮れている状態) と呼んだ状況を通過しなくてはならなかった。と同時にそうした *désorientation* のさなか、文学活動と政治参加のあいだに何らかの妥協点を見だし、文字通り暗中摸索するように、自らの政治的態度を選び取らなくてはならなかったのである。ある者は文学活動を犠牲にする覚悟で反ファシズム闘争に身を投じ、またある者はフランス再生の希望をファシズムに見てその伸張に寄与しようとし、またある者は、ファシズムと闘う強い意志と「もはや何もすることがない」という無為の意識のあいだで引き裂かれ、「途方に暮れた」まま十数ヶ月を過ごすことになったのだ。

ところで、政治史の分野ですでに優れた研究成果が刊行され、事件のあらましやその歴史的意義を明らかにしている一方、文学研究の分野では、事件が作家たちに及ぼした影響を全体的に捉えようとする論考は僅かしか存在しなかった。特定の作家についてのモノグラフィや伝記に見られる記述は、他の作家についての考察が浅薄であることが多く、他方、20世紀の知識人全般の政治的動向を扱う2、3の研究書は、対象とする時代が広範囲にわたるがゆえに、事件を起点とする作家個々の動きを微細には叙述し切れていない憾みがあった。

## 2. 研究の目的

上記の事情に鑑み、ドレフュス事件以降、特に第一次世界大戦後の作家たちの政治的態度(それは往々にして反政治的な態度であったが)を概観した上で、「2月6日事件」を彼らがどう受け止め、事件をきっかけにいかなる立場を選び取り、またその選択が彼らの文学的営為にどのような影響を及ぼしたのか、明らかにすることを研究の目的に据えた。

より具体的には、2月6日事件を契機とする作家たちの政治回帰のさまを俯瞰的に把握し、事件が文学史上無視できぬ事件であったことをはっきりとさせた上で、何人かの作家(シャンソン、バタイユ、ドリュ・ラ・ロシエル)を対象として選び出し、彼らの政治的選択とその文学活動への反響を考察しようとした。

## 3. 研究の方法

(1) 1920年代から2月6日事件前夜までのあいだに書かれた、作家の政治参加に関する代表的エッセイ、事件後に文芸誌や新聞などに発表された作家たちの声明文や政治的信条

告白のたぐいを収集・分析する。

(2) 当時の世論形成に絶大な力を持っていた新聞、雑誌の事件報道や事件後の論調などをできるかぎり広く調べ上げる。その際、日本国内では入手できない資料に関しては、フランスに渡航し、フランス国立図書館などで閲覧する。

(3) 上に挙げた作家たち個々の政治的・文学的行程を踏まえ、事件と深い関わりのある文学作品の分析に入る。

(4) 以上の分析が完了次第、論文の執筆に取り掛かる。

## 4. 研究成果

(1) 2月6日事件を契機とする作家の急速な政治化は、これまでドリュ・ラ・ロシエル、ブラジャックやシャンソンら、事件後にひときわ目につく政治活動を始めた作家たちの例を引き合いに出して語られることが多かった。だが、2月6日事件が文学的「事件」であった証左は、政治闘争から断固として距離を取ろうとした作家たちの、微妙な態度変更の中にこそ見いだされる。

1927年のエッセイで社会からの完全な訣別を夢想し、植民地主義に対して覚えた義憤にもかかわらず政治への非介入主義を堅持していたアンリ・ド・モンテルランは、1935年刊行の『無駄奉公』では立場を如実に軟化させている。同書のうち、特に2月6日事件以降に書かれた部分に焦点を絞れば、作家が事件を機に、政治参加の可能性を真剣に考え始めた事実が浮き彫りになる。

闘う作家のイメージから最も遠いとされ、アンドレ・ジッドの「転向」に際しては批判的立場を表明していたロジェ・マルタン・デュ・ガールにおいても事情は同様である。事件後にジッドらと交わした書簡や当時の『日記』には、小説家としては飽くまで政治的出来事と距離を維持すべきだとしながらも、政治状況が悪化するようならば闘争に加わることも辞さないとする決意が見てとれる。2月6日事件の衝撃のもと、作家たちは「象牙の塔から外へ」出たのだというブラジャックの言葉に誇張はないのである。

19世紀末のドレフュス事件が作家たちの政治回帰の第一波であったとするなら、1934年の2月6日事件はその第二波であったといつてよいはずである。第一次世界大戦後の作家たちの政治的態度を概観した上で以上の分析結果をまとめたのが、後述の雑誌論文④である。

(2) 2月6日事件後の反ファシズム闘争で重要な役割を果たし、のちにジャン・ポール・サルトルによって現代アンガージュマン作家の祖の一人と見なされることにもなるシャンソンであるが、事件以前は政治参加に

関して懐疑的であったし、また政治行動に身を捧げているあいだも、政治参加を小説家の「責任」だと考えることは全くなかった。この点を踏まえた上で、1938年6月から『新フランス評論』誌に連載された小説『懲役船』を分析した。

小説家としては忘れられた存在であるシャンソンが今もなお歴史に名を留めているのは、彼が創刊者の一人として1935年11月に創刊した週刊新聞『ヴァンドルディ』のおかげである。ファシズムの脅威を前にした統一行動を訴えるこの新聞は、反ファシズムで一致するさまざまな政治的傾向の作家たちを結集して読者を増やし、1936年5月の人民戦線の勝利に大きく貢献したとされる。とはいえ、第二次世界大戦勃発から一年後に出版された日記の記述に見られるとおり、シャンソンは政治行動が必要な時期だと判断したから行動していたにすぎないのであり、平和が戻れば政治の場から身を引き、「歴史に背を向ける人間」に戻るべきだと考えていた。第二次大戦後、『レ・タン・モデルヌ』の編集メンバーに入るよう求めるサルトルの要請に断りを入れるのは、シャンソンの作家観がサルトルのアンガージュマン理論と根本的に相容れなかったからに他ならない。

小説『懲役船』の主人公ジャン・ラボーは、政治行動に身を捧げることによって本来の文学活動から引き離されてしまった作家シャンソンの分身である。1938年7月、シャンソンは国際作家大会で世界の政治情勢に触れ、作家が政治闘争に加わる必要性を強調する一方、そうした状況のせいで本を書くことが「石や手榴弾を投げる」ことと等しくなっていると嘆くが、文書館員ラボーもまた、反ファシズム闘争に加わることで、「歴史の外」にある地方の人々の生活を描くという積年の夢を捨て、政治パンフレットの執筆に身を躡る羽目に陥っている。彼のそうした生活を「墮落」だと批判する女性登場人物の言葉は、シャンソンが自分自身に対して、またやむを得ず政治闘争に加わっていたすべての作家たちに対して投げかけていた言葉であると読むことができるはずである。以上の分析結果をまとめたのが、後述の雑誌論文②である。

なお、この分析にあたっては、新聞『ヴァンドルディ』全誌、ならびに上記国際作家大会の記録などをフランス国立図書館で閲覧したが、その過程において、既存のシャンソン研究の書誌からは漏れたテキストを複数「発見」する幸運にも恵まれた。

(3) 2月6日事件から一年半あまり後、バタイユはシュルレアリスムの首領アンドレ・ブルトンと手を組んで革命的知識人同盟コントロール・アタックを創設し、既存の闘争組

織とは一線を画す反ファシズム運動の拡大を目指す。バタイユはその意味で、事件を機に政治行動を開始ないし急進化させた作家たちの一人であると見なしうる。だがその一方、彼が同じ事件を機に、政治からの撤収を思い詰めるにまで至っていたことも見逃してはならないだろう。こうした点を明らかにすることで、小説『空の青み』に新たな読解の可能性を示した。

バタイユが二月六日事件から受けた衝撃のほどは、事件から数日後に書かれた書簡に読み取ることができる。バタイユはそこで即刻旗幟を鮮明にし、具体的な行動方針を策定しなければならないと述べているからだ。だが事件の衝撃は、バタイユに全く逆方向の選択も考慮させずにはおこななかった。『フランスのファシズム』という、執筆時期(1934年)から見てもタイトルから見ても、二月六日事件を意識して書かれたとしか思われないうテクストで、バタイユはファシズムの近い勝利を宣言し、またこの勝利によって全体化した社会においていかなる「体験」が可能か問うている。「恍惚のなか」死に接近する体験として素描されるこの体験は、数年後、政治からの離脱を標榜する秘密結社「アセファル」で、「死を前にした歓喜」と呼ばれることになる神秘体験を予告するものだ。事件を機に、大半の作家たちが政治行動に駆り立てられていくなか、バタイユは政治参加と政治からの撤収のあいだで揺れ動いていたことになる。

2月6日事件後のヨーロッパを舞台に据え、翌1935年5月に書き上げられた『空の青み』は、こうしたバタイユの二重性を如実に反映した小説である。主人公トロップマンは、極左の女性闘士ラザールを前にして、救いようのない政治的ペシミズムを表明する一方、滞在中のバルセロナで労働者蜂起の噂を耳にすると、物質的な協力を申し出ずにはいられない。とはいえ、労働者たちに加勢し、街頭での争いに加わるといった意志は一切持つことができないのである。そのような彼が口にする自責の念は、いかなる決断も下すことができず、ファシズムに呑み込まれていく世界を苦々しい思いで眺めているほかなかったバタイユ自身の言葉に他ならなかったろう。小説『空の青み』はその意味で、2月6日事件を機に分裂した著者バタイユの「反映」であると言えることができる。以上の分析結果をまとめたのが、後述の雑誌論文③である。

なお、同論文を掲載した雑誌の企画に応えるかたちで、バタイユの物語テクストを集めたプレイヤッド版の編集責任者であり、同プレイヤッド版で『空の青み』の編集を担当した、ジャン・フランソワ・ルエツト氏のインタビューを実施した。その内容をまとめたの

が、後述の「その他」の欄にあるインタビュー記事である。

(4)『空の青み』の「序論」にあたる数ページは、2月6日事件よりずっと以前、1920年代の後半に執筆されたものとされている。そのことを裏付けるように、小説の他の部分が1934年当時のヨーロッパの政治状況を絶えず喚起するのに対し、「序論」中には政治に関する直接的な言及は一切見られない。だが、一見政治色の希薄なこの数ページも、『空の青み』の中に組み込まれることで、意想外の政治的意味合いを帯びることになっている。

裕福なブルジョワ女性として設定されている登場人物ダーティーは、投宿した高級ホテルの従業員たちに悪態をつくが、彼女を苛立たせているのは、この労働者たちの従順さ、卑屈さであり、ブルジョワジーとの関係における反抗的反応の不在である。小説では、のちに「労働者運動の衰滅」がトロツマンとラザールらの会話で問題となるが、「序論」はその原因の一つが、労働者における革命的情動の減退にあると示しているように読める。また、労働者の精神的ブルジョワ化に反発するかたちで最も低級なキャバレーに乗り込み、周りの男たちを性的に挑発するダーティーの行動は、バルセロナの労働者組織のアジトで周りの男たちを幻惑するラザールのそれを先取りした行動であり、文字通り身を挺した労働者への呼びかけであると捉えることができる。以上の読解を、「序論」が引き起こす他の読解可能性とあわせて論じたのが、後述の論文①である。

(5) 戦闘なき世界において、人間のうちにある「戦闘本能」をどうすればいいのか——第一次世界大戦での戦場体験を通過することで作家となったドリュ・ラ・ロシエルが、1920年代から30年代初頭のさまざまなテキストにおいて問題にしたのはこうした問いであった。ドリュにとって2月6日事件が決定的であったのは、ファシズムこそがフランス再生への道だと確信させてくれたからだけでなく、街頭におけるデモ隊と治安部隊の衝突を間近で見ることで、戦闘本能を十全に解放させてくれるのは戦闘しかないという、一見単純な事実が目覚めさせてくれたからではなかったか。事件をそのクライマックス部に据える小説『ジル』は、このような視点を踏まえた上で読解されなくてはならない。この点に関する論文の執筆は、今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

① Koichiro Hamano, « L'Introduction du *Bleu du ciel* », *Cahiers Bataille*, 査読あり, n° 1, 2011, pp. 67-74 ; 234-235.

② Koichiro Hamano, « Le 6 février 1934 et les écrivains (II) : André Chamson », *Stella*, Université de Kyushu, 査読あり, n° 29, 2010, pp. 151-168.

③ 濱野耕一郎 「二月六日事件とバタイユ」、『水声通信』、査読なし、第30号、2009年、pp. 120-131.

④ Koichiro Hamano, « Le 6 février 1934 et les écrivains (I) : hors de la tour », *Études françaises*, Université Aoyama Gakuin, 査読なし, n° 18, 2009, pp. 32-54.

〔その他〕(計1件)

ジャン＝フランソワ・ルエット『小説と物語』編集余話」濱野耕一郎、『水声通信』、査読なし、第30号、2009年、pp. 194-201.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

濱野 耕一郎 (HAMANO KOICHIRO)

青山学院大学・文学部・准教授・

研究者番号：80383496